

# 「GCA 東京」報告その 1

## 異分野の研究・教育者間の協働による 日本語・日本文化研修の取り組み

—プロジェクトワーク型の課題探求型現地研修を中心に—

幸松 英恵

### はじめに

「学習院大学グローバル・キャンパス・アジア東京（以下、GCA 東京）」は、学習院大学国際センターが主催する短期の日本語・日本文化研修である。2013年に始まり、今年で8年目を迎える。

このプログラムでは、午前には日本語授業が行われ、午後には課題解決型現地研修が行われる。この「課題探求型現地研修」とは、留学生が“日本に来たからこそ調査できる”課題を見つけ、その課題に関わる場所を訪れて現地調査をしたり、時にはインタビュー調査を行ったりして、わかったことをまとめて発表するプロジェクトワーク型の研修である。期によって濃淡はあるが、多くの場合、午前と午後の授業は連携しており、最終日に大学内の講堂で行われる「課題探求型現地研修の大報告会」がプログラムのゴールと定められている。

GCA 東京は、所属する機関の組織上の事情により、異なる分野の研究・教育者が協働して企画、運営を行ってきた。日本語教育、日本語学の専門家だけではなく、国際センターに所属する歴史学、経済学、政治学などの研究者が協力して担当するという、珍しい体制を持つプログラムであった。筆者の幸松は日本語学を専門とする研究者であり、かつ、日本語教育にも携わってきた。GCA 東京では、1期から9期まで課題探求型現地研修を担当してきたほか、7期から9期までは日本語研修のコーディネーターも兼ねている。筆者以外にどのような専門のスタッフが関わってきたのかについては、V-1で詳述する。

こうしてGCA 東京は、様々な分野の研究・教育者が関わって作り上げていく過程で、単なる日本語研修にとどまらない、課題解決型現地研修というプロジェクトワークにプログラムの重点を置く、やや特殊なプログラムとなっていたが、GCA 東京の特徴はそれだけではない。毎回のプログラムには学習院大学の学生（ほとんどの場合は日本語母語話者）が参

加する。彼らは留学生と共学・協働するために参加するのであり、時には教師と連携して企画や運営の一部を担ってきた。日本語授業で留学生の会話相手になったり、留学生の発表の聴衆になって質疑応答に加わったりするという受け身の参加ではなく、同じ立場で学び、共に発表することが求められる。

このように、①課題探求型現地研修というプロジェクトワークに重点を置いたプログラムであり、②学習院生も加わって留学生と共学・協働するプログラムである、ということによる成果が認められ、GCA 東京は 2021 年度から学習院大学における学部の正規授業として単位化されることとなった。本報告は、GCA 東京が大きな転換点を迎えるにあたり、これまでの GCA 東京の歩みを記録し、報告しようとするものである。その際にはプログラムの概要を羅列するにとどまらず、できるだけ GCA 東京の特徴が伝わるように記述していく。

## 1. 「学習院大学グローバル・キャンパス・アジア東京」の誕生

### 1. 「グローバル・キャンパス・アジア」プログラム

前節では GCA 東京の特徴として、異なる分野の研究・教育者が協働して企画・運営をするという点、日本語母語話者である学習院生が共学・協働するという点の 2 つを挙げた。しかしこれは組織上の事情であったという面も否めない。ここでは本題に入る前に GCA 東京の成立経緯についても簡単に触れておく。

2012 年、学習院大学に「学長付国際研究交流オフィス」という名称の機関が設置された。「国際交流研究」ではない「国際研究交流」という組織名からもわかるように、国際的な研究に従事する研究者が集まり、世界の研究者と学術的交流を深めるためのプロジェクトを行う組織であった。任務には「国際研究」のみならず「国際教育」も含まれており、その一環として、研究者間の人的交流を生かして学生を海外の短期研修に派遣するプログラムが始まった。

当時のオフィスの構成員には中国や韓国に研究のベースを置く研究者が一定数存在していたこともあり、「アジア全体をグローバルなキャンパスに見立てて、学生が相互に学び合う」ことを理念として「グローバル・キャンパス・アジア（GCA）」プログラムがスタートした。2012 年 8 月には中国・上海の復旦大学の短期語学研修に参加しつつ、午後の空き時間を使って現地で課題探求型現地研修を行う「GCA 上海」と、同趣旨の内容を韓国・大邱の慶北大学校で行う「GCA 大邱」という 2 つの派遣プログラムが開催され、学習院生が合わせて 40 名参加した。GCA の派遣プログラムは、2013 年以降、「GCA 北京」「GCA 西安」、「GCA 台北」「GCA 香港」と、その数を徐々に増やしていくことになり、毎年「GCA 派遣

生」として40名程が各地に派遣されていった。

一方、2013年にはGCAを「学習院生の海外大学への派遣」と「海外学生の学習院大学への受け入れ」という相互交流型のプログラムとするため、世界の大学生を学習院大学に集めて日本語・日本文化の短期研修を行う「GCA 東京」が初めて実施された。

以上述べてきたように、国際的な研究や教育を推進する研究・教育者が勤務する機関において、まず学生を海外へ派遣する事業から始まり、互換的なプログラム設置のニーズを受けて海外の学生の受け入れが始まったというのが「GCA 東京」誕生の経緯であった。「日本語教育センター」や「留学生教育センター」のような日本語教育専門機関で生まれた短期研修ではなく、機関には日本語教育を専門とする専任教員が存在しなかった。プログラムにおける日本語研修部分は、外部のコーディネーターを有期で雇用し、日本語授業は多くの場合学習院大学卒（または大学院修了）の日本語教師が非常勤講師として担当した。課題探求型現地研修部分は、歴史学や経済学の専任教員や、日本語学、歴史学、政治学などを専門とするPD共同研究員が担うことになり、GCA 東京の企画が動き出したのであった。

## 2. 「グローバル・キャンパス・アジア (GCA) 東京 2013」の実施

2013年7月1日から19日まで行われた「GCA 東京 2013」は、午前の日本語授業と午後の課題探求型現地研修によるプログラムとして実施された。現地調査が可能な日本語能力が求められたため、留学生の参加条件は日本語能力試験 (JLPT) のN2相当以上であった。その結果、中国、韓国、台湾、香港などの東アジアの学生が参加者の多くを占めることとなった。ほとんどの学生が日本語や日本文学を専攻とする学生であり、総じて留学生の日本語能力は高く、課題探求型現地研修も媒介語なしに実施された。

午前に行われる日本語授業は、学習院大学日本語日文学科の村野良子教授（当時）の監修のもと、学習院大学を卒業・修了した教師陣が担当した。市販の教材を使うのではなく、コーディネーターを中心として自作のテキストを作成し、読解授業、聴解授業、口頭表現や文章表現など、3週間という短い期間ながら4技能を伸ばせるような授業を組み立てていた。

午後の課題探求型現地研修は、留学生一人ずつが興味・関心に従って「日本の歴史・美術」「日本の社会・経済」「日本の伝統文化」「日本の現代文化」の4つのグループに分かれ、その中で自分自身が取り組みたい小テーマを選んで調査を実行するというプロジェクトワーク型の研修であった。教員は、学生に対してどのような研修をしたいのか、来日前から聞き取り調査をしておき、その希望に基づいてどのようなサポートができるのかを考え、場合によっては現地調査に際しての予約やアポイントメントが必要なら、その調整役も担った。学生の来日後は、プログラムの冒頭で3週間の日程を使ってどのように現地調査を進めるのか、



キャンパスツアー



課題探求型現地研修最終報告会

一人ずつと相談し、予定を決定していった。予定が定まった留学生は都内の様々な場所に散っていき、現地調査やインタビュー調査を行い、調査結果は最終日の「大報告会」において発表された。

日本語教育を担当する非常勤教師は午前の授業のみを担当することになっており、課題探求型現地研修の引率や指導は、日本語教育の専門外の専任教員、またはPD共同研究員のみで行われた。留学生教育そのものに関わったことがなかった教員が多く、使用する日本語レベルの調節などの日本語教育的な配慮がなされていたとは言い難いが、現地調査について専門的なアドバイスが可能という利点があった。目標言語の習得を目的として現地の短期研修に参加して、その大学の（日本語教育以外の）研究者に直接、調査や発表の指導を受けることは珍しいことと思われるので、ある意味では恵まれたプログラムと言えた。

### 3. 大交流会

GCA 東京 2013 では、プログラム期間中の最初の土曜日と日曜日の2日にかけて「大交流会」が行われた。この企画と運営は、前年度に上海の復旦大学と大邱の慶北大学校への派遣プログラムに参加した学習院生（「GCA 上海」と「GCA 大邱」の派遣生）が担当した。ちょうど1年前に自分たちが派遣生として中国や韓国に行き、現地の学生と交流した「お返し」として、GCA 東京に参加中の留学生のため数ヶ月前から1泊2日のイベントを企画してきたものであった。この派遣生が40名、GCA 東京に参加中の留学生が50名、2013年の夏（GCA 東京 2013 が行われた翌月）に派遣が決定していた学習院生が40名ということで、合わせて100名以上が留学生の宿舎として利用していた国立オリンピック記念青少年総合センターに集合した。

学生たちは、早稲田大学のよさこいサークルの学生の指導で「ソーラン節」を練習して踊





大交流会ソーラン節体験



「大交流会」全体写真

ったり、学習院大学華道部の学生の指導で「生け花」を体験したりした。日本文化体験だけではなく、それぞれの国の学生がグループを作って自分の国の「観光地」や「ことわざ」についてプレゼンを準備しておき、それを発表する「プレゼンテーション大会」、日本の社会的な事象についてディスカッションをする「ディスカッション大会」も行われた。学習院大学長の福井憲彦教授（当時）も参加、最も活躍した留学生に著書を贈るという場面もあった。

実はこの大交流会も、課題探求型現地研修を推進するための機会の提供という意図が含まれていた。大交流会には中国、韓国、台湾などに派遣されていた学習院生と、それらの国から学習院に集まった留学生、さらに1ヶ月後に派遣を控えている学習院生という3様の立場の学生が集っていたので、学習院生は留学生に対し、彼らの課題探求型現地研修の内容にアドバイスを与える一方、留学生は、自分の国に渡航予定の学習院生に対して現地での課題探求型現地研修のアドバイスを与えるという双方向の助け合いが見られた。「グローバル・キャンパス・アジア」が、アジアの学生たちが相互に学び合うことを目的として始められたプログラムであることは前述したが、その見地からは、日本から派遣される学習院生と、日本へ派遣されてきた留学生が一堂に会し、お互いをサポートして交流を深めて学びあう「大交流会」は、GCAの理念を体現したものであると言える。単なる「遊び」を通じた交流ではなく、学習院生の企画により日本文化を体験し、コンテンポラリーなテーマについてディスカッションし、それぞれの国を知るためのプレゼンテーションがなされ、お互いの課題探求型現地研修に対するアドバイスも交換されるという意義深いイベントであった。

#### 4. 参加する学習院生の役割

こうしてGCA 東京 2013 は、午前に行われる日本語授業、午後に行われる課題探求型現地研修、期間中に1泊2日で行われる大交流会という3つの側面から成り立っていた。それぞれの活動に参加する学習院生（これを「日本側参加者」と呼ぶ）は、大学のHPや一斉メ

ール、キャンパス内の立看板などで募集され、100名以上が参加した。日本側参加者の役割としては、午前の日本語授業に参加する場合は、研修生と共にテキストの読解をしたり、その内容を踏まえてディスカッションをしたり、時には留学生とグループで発表を行うことであった。午後の課題探求型現地研修に参加する場合は、留学生が希望する課題探求テーマに基づいて一緒に現地調査を行ったり、調査後のまとめ作業に対して助言を行ったりする役割だった。大交流会では、交流イベントを企画・運営するマネージメント的な役割を果たした。

どの側面に参加するかによって役割の違いはあるものの、日本側参加者は総じて「日本語ネイティブ」という強みを生かして「教える」「手伝う」という姿勢で参加するのではなく、留学生と同じ立場で、参加者の一人として参加することが求められた。「カンパセーションパートナー」や「サポーター」ではなく「日本側参加者」と呼ぶようになったのは、「共に学ぶ」という姿勢で参加してほしいという理念によるものであった。

## II. GCA 東京の発展

### 1. 1期から9期までのプログラム参加人数一覧

前節では、GCA 東京の成立の経緯を明らかにしつつ、GCA 東京の方向性を決定づけた「GCA 東京 2013」の概要について述べた。手探りだった GCA 東京 2013 が成功のうちに終了し、これに手応えを感じた翌年の 2014 度からは、GCA 東京は夏と冬の 2 回開催となった。学習院大学の学事暦に合わせ、夏は 7 月から 8 月の間、冬は 1 月から 2 月の間、つまり夏休みと春休みという長期休暇の間に開催された。筆者が担当した 1 期から 9 期までの参加人数一覧を以下に示す。（「日本側参加者」である学習院生の人数は概数である）

留学生の人数が一定ではないのは、JASSO（日本支援機構）の奨学金取得がある回には参

表 1 グローバル・キャンパス・アジア東京参加者数の推移

期	実施時期	参加留学生の国・地域	留学生数	学習院生数
1	2013. 7	韓国・中国・台湾・豪州・インドネシア	50	100
2	2014. 7	韓国・中国・台湾・豪州	50	100
3	2015. 1-2	エジプト・フランス・イギリス・豪州・タイ・インドネシア	33	60
4	2015. 7	韓国・台湾・中国・豪州・アメリカ・カナダ・フランス・タイ・インドネシア	51	100
5	2016. 1-2	韓国・中国・台湾・フランス・オーストラリア・タイ	33	80
6	2016. 7	韓国・中国・台湾・豪州・タイ・フランス	36	100
7	2017. 1-2	韓国・中国・台湾・豪州	40	40
8	2017. 7-8	韓国・中国・台湾・豪州・タイ・フランス	33	100
9	2018. 2	韓国・中国・台湾・豪州	33	30
			359	710



GCA2014 東京 大交流会

(黄色シャツが留学生, 青シャツが日本側参加者と派遣生)



GCA 東京 2014 最終報告会

加人数制限があったり、学事上の理由から春節の時期に開催して東アジアからの参加人数が極端に減ったりしたためである。その都度の事情により増減はあるが、留学生数は30名から50名の間で推移している。

転じて学習院生（日本側参加者）の参加人数は、初回（1期）に100名以上が参加した後も、毎回のプログラムにおいて60名から100名の参加者を集めた。7期と9期が極端に少ないのは、課題探求型現地研修を合宿地（それぞれ、千葉県の一宮と金谷）で行ったため、合宿地の宿泊施設に収容可能な人数に制限する必要があるためである。

## 2. 派遣元大学での評価の定着

参加留学生がこのプログラムを知るきっかけは、協定校への案内メール、日本語日本文学科の教員による宣伝、国際センターの教員の宣伝など様々である。その中で見逃せない宣伝媒体は、実は過去の参加者による「口コミ」であった。筆者が派遣元の教員と参加者募集について連絡を取りあう中でしばしば指摘されたのは、GCA 東京に参加した学生は学習院大学に対する強い愛着を持って帰る学生が多いということであった。

今や日本の数多くの大学で短期日本語研修が実施されており、各派遣元大学においても、学習院大学 GCA 東京は、複数存在する短期日本語研修先の選択肢の1つにすぎない。しかし派遣が定着している大学では、先輩から後輩への口コミ情報が非常に好評で、「学習院 GCA 東京が短期留学先として一番人気」という現象が見られるようである。

毎年一定の参加者が見られる協定校の一つに台湾の東呉大学がある。この大学からは、多いときには30名ほどの参加希望者の名簿が送られてくるのであるが、その名簿は日本語学科における成績順（教員の推薦順）になっている。こちらの受け入れ可能数に合わせて上から選んで欲しいという意図であり、推薦者である担当教員によると「GCA 東京に参加する



GCA 東京 2015 春 研修旅行

ことを目標として学科の成績を上げようと頑張っている学生もいる」とのことであった。

同じく協定校の1つであり、GCA 東京に継続して参加者を輩出しているオーストラリアのニューサウスウェルズ大学（UNSW）の担当教員からは、「学習院の日本語研修に参加した学生は、人が変わって帰ってくる」という話を聞いた。「もっと日本語を頑張って、また学習院大学に帰りたい」と言うのだと笑いながら言われたこともある。

GCA 東京が参加者から一定の評価を受け、持続的に参加者をひきつけてきた理由は何なのかについて思い当たることを記せば、まさに当プログラムの特徴に起因すると思われる。すなわち、日本語母語話者である学習院生との共学・協働による課題探求型現地研修である。毎回、プログラムに参加した留学生には、参加動機の聞き取り調査をしているが、「学習院」というブランドに惹かれて参加したという学生はこれまで会ったことがない。正直に言って、学習院大学は世界規模で知名度の高い大学とは言えない。それでも参加する学生は、教師からの推薦なり、先輩からの口コミなりで GCA 東京の情報を知り、その内容をよく知った上で選択したという学生がほとんどである。それらの学生が口を揃えて言うのは「朝から晩まで日本語を使い続けるプログラムだと聞いたから」という参加動機である。午前の日本語授業では日本側参加者と机を並べて座り、共に学ぶ。午後の課題探求型現地研修では日本側参加者と現地調査に赴いたり、インタビューをしたり、まとめ作業を行ったり、発表をしたりする。午後の研修は日本語力そのものの向上を狙っているわけではないが、日本側参加者と協働をする中で、自然と日本語を使うことに対して慣れが生じ、2、3週間後には自分でも驚くほど日本語会話に対する自信が得られるのだという。本プログラムの対象学生である中上級の学生は、それなりの動機を持って日本語学習を続けてきた学生であり、将来的には日本への長期留学や、大学院進学、日本での就職も射程に入れている学生が少なくない。そのような学生からは「普通の日本語研修だったら来なかったと思う」「他にはない、少し



変わったプログラムと聞いたから」などの参加動機をしばしば聞いたものであった。

### 3. 学生間の交流の定着

留学生の数に比して、これだけ多くの日本側参加者を、しかも毎回どうやって集められるのかという点に関しては、しばしば他の教育機関の関係者に驚かれるところである。理由の一つとして、学習院大学には日本語教育を専門業務とする教育機関が存在しないことが挙げられるのではないかと考える。つまり協定留学生を受け入れる正規のプログラム以外で、短期に多くの留学生が一堂に会するプログラムはGCA東京のみである。そうすると、学内に日本語教育機関を抱える他の大学に比べて、留学生と会話をしたり交流したりする場が不足しているため、相対的に国際交流経験に対する飢餓感がある、と言えるだろう。

さらに、GCA東京の特徴も大きく作用すると考えられる。つまりGCA東京が午前の日本語研修で終わるのではなく、午後に課題探求型現地研修も行ってたことで、研修生と行動を共にする機会が自然と多くなり、それが彼らとの絆を深めることに繋がるようであった。授業に参加して留学生の会話相手になったり、発表を聞いてコメントしたりするという役割に止まらず、一緒に東京を歩き回り、昼食も夕食も一緒に食べ、最後の発表会まで完走する。その達成感を味わった日本側参加者がリピーターとして毎回のGCA東京に参加するようになる、という現象が定着していった。このようなプログラムにおいては学生同士の「口コミ」の影響は大きい。こうして、相対的な国際交流経験への飢餓感とGCA東京の特徴が相俟って、毎回の日本側参加者の応募状況に良い影響を及ぼしていたと言えるだろう。

しかし運営の側から見て（多いときは）100名からの日本側参加者を管理するのは簡単なことではなかった。4、5回に分けて説明会を行い、一人ずつの応募フォームを確認し、日本語授業に参加したいのか、課題探求型現地研修に参加したいのか、大交流会のマネジメントをしたいのかを把握した。日本語授業に参加したい学生に対しては、どの日のどの時間の授業に入りたいのかを聴取し、シフトを組むように調整を行った。日本側参加者の数が留学生の数を上回ってしまうと授業運営に支障をきたす可能性があるため、1クラスに15名の留学生がいる場合、最大で日本側参加者の参加を15名で調整する必要がある。さらに、複数日にわたるプロジェクトワークを行う授業を計画している場合、多くの日程に出席できる日本側参加者を優先しなければならない等、様々な事情を考慮に入れて調整する必要があり、その手配は手間のかかるものであった。それでも多くの学習院生に国際交流の機会を提供したいという気持ちから、スタッフ一同、説明会の実施、シフトの希望調査やそれに基づく調整、連絡のやり取りなどは常に万全を期すように心がけていた。

留学生に対しても、日本側参加者に対しても、毎回のプログラム終了時にはアンケートを



留学生と共学する学習院生

行ってきた。プログラムに対しての満足度や学んだ点や改善点などを聞いてきたが、そうした調査で両サイド共通して最も多く言及されるのは、相互交流に対する満足感である。しかし調査を行うまでもなく、日本語授業や課題探求型現地研修において、学生の顔がもっとも輝き、生き生きとし、モチベーションが高まるのは、国境をこえて同世代の学生同士が友人になり、その友人と何かをしている時である。3週間の研修を終え、最後の送別会では、お互いがサプライズの贈り物を用意したり、寄せ書きを準備したりといった光景もしばしば見られ、別れがたいと涙を流して抱き合う学生、空港に見送りについて行く学生もいる。お互いの国を尋ね合ったと報告に来る学生もいる。その後のGCA東京の交流会には過去の参加者が集まる現象も起こった。GCA東京はたった2、3週間の研修にすぎないが、いまだに交流を続けている学生も珍しくない。

### III. 課題探求型現地研修の発展

#### 1. 1期から9期までの課題探求型現地研修の概要

以上、筆者が課題探求や日本語研修のコーディネーターとして担当した1期から9期までの概要を表にまとめた。こうして振り返ると、実に様々な研修地に赴き、多様なテーマで調査をしてきたことがわかる。1期から6期までは個人が自身の興味・関心に従ってテーマを見つけ、そのテーマについて深く知ることができる場所を訪問地として選び、現地調査を行ったりインタビュー調査を行ったりするという方法をとっていた。指導教員が分担しやすいように、おおよその枠組みとして「歴史・美術」「伝統文化」「現代文化」「社会・経済」と4つの枠組を設けていたこともあったが、グループ調査をしていたというわけではない。留

表2 1期から9期までの課題探求型現地研究の研修先や発表タイトルの例

期	①名称、実施時期／②形態／③研修先の例／④発表タイトルの例
1	① 「GCA 東京 2013」 2013 年度 7 月実施
	② 「日本の歴史・美術」「日本の社会・経済」「日本の伝統文化」「日本の現代文化」の 4 枠
	③ 目白庭園, 江戸東京たても園, 国会議事堂, ANA, 日産横浜工場, 歌舞伎座, 代々木アニメーション学院, ジブリ美術館など
	④ 着物の文様からみた日本の美意識, 日韓工場の比較, 浴衣を通してみる日本文化, 茶道の歴史, 日本映画について, 声優の影響など
2	① 「GCA 東京 2014 夏」 2014 年度 7 月実施
	② 「日本の歴史・美術」「日本の社会・経済」「日本の伝統文化」「日本の現代文化」の 4 枠
	③ 明治神宮, 国立新美術館, テレビ朝日, 最高裁判所, 六義園, 和菓子屋栄太楼, 劇団ひまわり, NHK, ESP ミュージカルアカデミー, グループホーム「ふれあいの里としま」, 川越歴史博物館, 伝統工芸青山スクエアなど
	④ 浮世絵の魅力が印象派に与えた影響, 台湾と日本の伝統の建物の比較, 日本の裁判所, 台湾と日本のテレビ番組の比較, 京劇と歌舞伎の違い, 日本の伝統衣服, アニメ音響監督について, 商品から見た日本のかわいい文化, 日本の百年企業など
3	① 「GCA 東京 2015 春」 2014 年度 1-2 月実施
	② 「日本の伝統文化」と「日本の現代文化」の 2 枠
	③ 刀剣博物館, シク教寺院, 福寿園 (茶道体験), 明治神宮内の神道研究所, 目白庭園
	④ 日本の刀剣, 日本におけるインド移民, 日本の和菓子, エジプトの寺院と日本の寺, 日本の伝統的な建物, アニメと声優, 日本での食事マナー, 着物の柄など
4	① 「GCA 東京 2015 夏」 2015 年度 7 月実施
	② 「日本の歴史・美術」「日本の社会・経済」「日本の伝統文化」「日本の現代文化」の 4 枠
	③ 東山稲荷神社, 氷川神社, 静嘉堂文庫, 神保町古書街, 国会図書館, 森美術館, 太田浮世絵美術館, 新宿 ReNY, 池袋 EDGE, 上野公園, 団地の公園, ゴミ焼却場, 豊島年金事務所, ハローワーク, 空手道場, アドミュージアム, 国立劇場, 文化学園服飾博物館など
	④ 千寿七福神と日本人が神社に行く理由, 東アジアの書物文化の比較研究, 日本のライブハウス, 森林文化と都市の融合, 東京の都市におけるゴミの分別, 国民年金と生活保護, 古着の街・下北沢, 日本の空手
5	① 「GCA 東京 2016 冬」 2015 年度 1-2 月実施
	② 4 つの枠を廃止。個々が枠にとらわれず自分のやりたいテーマを設定する。
	③ 都庁, 江戸東京博物館, 浅草寺, 声優ミュージアム, タワーレコード, ラーメン博物館, 東京ドーム, 文化学園服飾博物館, 渋谷きもの芸術館, 歌舞伎座, 明治神宮, フジテレビ, ABC キッキングスタジオ, 丸草一福, アメ横
	④ 東京の有名な町, 日本のテーマカフェ, 日本のラーメン, アニメ制作と声優, 日本の台湾の大学生の比較, 日本人のアルバイト, 日本の着物, スーパー歌舞伎など
6	① 「GCA 東京 2016 夏」 2016 年度 7 月実施
	② 4 つの枠はなし。個々が自分のやりたいテーマを設定する。
	③ 新寿堂手帳工場見学, 日本ナレーション演技研究所, 消防博物館, 広告博物館, サッカー博物館, 築地市場, シモクラ楽器, イシバシ楽器, 築地市場, 元祖くじら屋, 銀座夏野, 和食器店など

期	名称、実施時期／②形態／③研修先の例／④発表タイトルの例
	④ 日本の手帳文化、日本の声優と台湾の声優、台湾の災害科学教育館と日本の消防博物館、日本の広告と台湾の広告との違い、日本人のサッカー文化、日本と台湾の楽器店の違い、日本人の捕鯨への考え方、和食器と食事マナーなど
7	① 「GCA 東京 2017 冬」 2016 年度 1-2 月実施
	② 学生を9グループに分ける。「一宮の暮らし・移住」（以下、「一宮の」は省略）「歴史」「政治」「教育・子育て」「自然」「スポーツ」「文化」「農業」「郷土料理」
	③ 一宮町役場、一宮商業高校、一宮小・中学校、原保育所、学童保育わんぱくクラブ、上総一宮郷土史研究会、一宮地曳網保存会、一宮町幹部交番、一宮町南消防署、一宮ネイチャークラブ、玉前神社、近藤いちご園、長生フロンティアファーム、サーフショップなど
	④ 若者の一宮への移住、地引き網漁による観光振興、一宮町の災害避難経路、一宮の教育（保育園～中学）、海だけでない一宮の魅力、一宮のスポーツ・レジャー、一宮町の文化ツアー、いただきます一宮の味！
8	① 「GCA 東京 2017 夏」 2017 年度 7-8 月実施
	② 留学生と日本側参加者を9グループに分ける。「日本のものづくり」（以下、「日本の」は省略）「メディア」「ゲーム・アニメーション」「歴史・文化」「行政」「経済」「宗教」「商業」「食文化」
	③ 大田区産業振興協会、広沢電気工業株式会社、テレビ朝日、代々木アニメーション学院、東洋文庫、豊島区役所、東京証券取引所、渋谷金王八幡宮、谷中銀座振興協会、和菓子店栄太楼など
	④ ものづくりの過去と現在一町工場は長く生き残る一、テレビ朝日の番組制作の裏側、アニメーションの生まれる場所、浮世絵が描く江戸時代の災害対策、豊島区の外国人行政、電子化後の東証の収益の変化、都市に溶け込む金王八幡宮、谷中銀座に残る人間関係の温かさ、季節を演出する和菓子
9	① 「GCA 東京 2018 冬」 2017 年度 1-2 月実施
	② 留学生と日本側参加者を6グループに分ける。「金谷の暮らし」（以下、「金谷の」は省略）「歴史」「芸術」「食文化」「文化」「交通」
	③ コワーキングスペースまるも、金谷小学校、金谷中学校、SANGA Soba&Coffee STAND、Pizza GONZO、日本寺、金谷美術館、音楽と珈琲の店 岬、カフェえどもんず、the Fish、鋸山ロープウェー、東京湾フェリーなど
	④ 「暮らしっく」（移住者むけの金谷の魅力紹介）、「ゴールデンバレー」（鋸山から金谷の魅力紹介）、「カナスタグラム」（インスタ映えをテーマに金谷の魅力紹介）、「金谷食文化」（金谷の特産物であるアジフライ・チーズバウム・ピザを紹介）、「Break with a cup of coffee～まちカフェ巡り～」（金谷のカフェ文化を紹介）、「やっぱり金谷カナ」（観光地としての金谷を、交通の魅力を中心に紹介）

学生が個々に課題を決定して調査を進めるものであり、最終日の報告会では一人ずつが壇上に上がり発表を行った。

留学生が自由に課題探求テーマを選んでいた6期までのテーマの傾向としては、日本の神社仏閣、伝統建築、庭園、着物、茶道、歌舞伎といった伝統的なテーマもあれば、日本の漫画やアニメーション、ゲームや声優、テーマカフェなどのサブカル的なテーマも安定した人気を保っていた。

その一方で、他ではあまり見られないニッチな関心を持つ学生もいた。日本の高齢福祉事





代々木アニメーション学院見学



手帳工場見学



和菓子づくり体験



テレビ朝日 局内見学

業に関心を持ってグループホームを見学しホーム利用者に聞き取り調査をした学生、日本の税金のシステムに興味があり豊島年金事務所にアポイントメントを取ってインタビューに行った学生、自分の国とは異なるゴミ分別に関心を持ち焼却場に行った学生、市場のセリをテーマにして築地魚市場に朝早く訪れてセリを見学した学生、日本の音響施設が優れていると東京オペラシティにオケを聴きに行った学生、歌手になるのが夢だからと短期コースで音楽専門学校に通った学生、ギターを弾くのが趣味で御茶ノ水、新宿、池袋、渋谷などの楽器店巡りをした学生、写真の趣味が高じて横浜写真博物館に行って調査をした学生、日本の神保町で古本屋巡りをした学生、忍者について知りたいと忍者博物館を訪れた学生など、これも挙げていけばきりが無い。テーマが多岐にわたっているため、訪問地もバラエティに富んでいる。

## 2. 個人調査としての課題探求型現地研修の問題点

課題探求型現地研修を個人で行うことの利点は、留学生一人ずつが日本で調査してみたい

こと、行きたい場所、体験したいことを思う存分実行できる点にある。最終日の大報告会では幅のあるテーマがずらりと並び、純粋に留学生の日本に対する興味・関心目録として眺めても面白い。

しかし同時に、個人による課題探求型現地研修には問題点も見えてきた。如何せん参加人数が多いため教師の指導が手薄になってしまいがちなのである。プログラム実施時期は普段の業務の枠を超えて機関を挙げての協力体制でどうにか凌いでいた面もあったが、時間の経過とともに縦割り業務になってくるとその体制も揺らいでくる。学生個人の資質で良い調査ができれば良いが、決してそうではない場合、「これでよかったのか」と思うような発表内容も見られるようになった。

まず、学生にテーマ設定を任せると、漠としたテーマを設定する学生がいる。「日本と台湾の大学生を比べる」「日本文化について調査する」などである。また、「日本人の死生観」「一期一会の精神について」のように現地調査が難しいテーマを選ぶ学生もいる。また「東京の大学生の一人暮らしの実態調査」のように、テーマとしては悪くないが、調べにくいテーマもある。

次に、調査内容の問題として、学生一人一人では備わっている能力も使える時間にも限界がある。そのためであろうか、せっかく現地調査した内容が発表に反映されにくいという問題があった。例えば「日本の神社」をテーマにする学生は毎回一定数存在していた。そこで筆者は学生を明治神宮に引率し、神宮の森を歩きながら神職の方から説明を聞いたり、神楽殿に上がり、巫女舞を見学したり、神道研究所の方にインタビューをさせていただいたりもした。しかしそうした体験をしているにもかかわらず、学生の発表を聞くと「明治神宮の沿革、歴史」のようなHPを見ればわかる内容に終始することも少なくなかった。恐らく、日本語学習者にとっては現地研修で見聞した内容を文字化するのは難しく、HP上の文字化された情報を写してしまった方が楽だと考えたためではないかと思われた。

他にも、次のような事例もあった。日本のメディア、特にテレビ局に興味を示す学生は多い。そうした学生には、テレビ局訪問を企画し、社員の方に局内を案内してもらい、サブ（音声調整室）に入って説明を受けたり、実際にキャスター体験をさせていただいたりもした。しかし、それらの学生が体験内容を発表するかというと決してそうではなく、好きなドラマの話やバラエティ番組の話で終わってしまう学生もいた。説明を受けたこと、体験できたことに対する事前知識がなかったり、もともと関心がなかったことであったりすると、せっかく見聞きしても記憶に残りにくいのだということがわかった。やはり人間は「知っていることしか見えない」ということであり、いかに事前準備をしておくことが必要かということも見えてきた。

これらの問題を総括して言えば、学生にテーマの設定や調査内容の発表内容について任せると、体験の貴重さとは関係なく、まとめやすい内容に流れてしまったり、自身の関心事を発表内容として選んでしまったりする、ということである。

### 3. 課題探求型現地研修の変化—個人発表からグループ発表へ—

個人で行う課題探求型現地研修では、30通り、40通りの調査を教員が隅々まで指導することは難しく、学生の資質によって完成度に大きな差がついてしまうことがわかってきた。理想的な調査を阻む悩み（テーマ設定を上手くできない学生がいる、せっかく調査をしても発表に盛り込めない学生もいる等）も見えてきた。日本語教育以外の専門家であるPD共同研究員は、フィールド調査を行う歴史研究者もおり、事前準備が足りない現地訪問は物見遊山的になってしまうことの問題を強く感じていた。

学生の興味・関心に従ったテーマ設定というのは学生の自主性に任せているというメリットがある一方、すでに自分が精通している分野について選んでしまうと知識の再確認をするにとどまってしまう、あまり自発的に新しい経験をしなくなってしまう。いかに学生たちに「新しい経験」をさせ、その成果を最後の報告会に結びつけることができるかということを実験に悩んだ結果、7期からは「教員がテーマ別のグループを定めてしまう」というシステムを導入することにした。

7期は初めて合宿を取り入れたプログラムであり、参加者全員で千葉県長生郡一宮町を訪れ、様々な観点から一宮について調べ、わかったことを盛り込んで町おこしのプロモーション番組を作った。その際に、「一宮の暮らし」「一宮の歴史」「一宮の政治」「一宮の教育・子育て」「一宮の自然」「一宮のスポーツ」「一宮の文化」「一宮の農業」「一宮の郷土料理」という9グループを教員が設定し、学生にはどのグループに入りたいかを第三希望まで挙げてもらうという形をとった。グループが形成されたのちは、何を具体的なテーマとするのかは学生同士で話し合わせた。現在にも引き継がれている「グループ調査による課題探求型現地研修」を初めて行ったのが、この7期であった。

8期は合宿に行かず、豊島区にある学習院大学の目白キャンパスを起点に課題探求を行ったので「一宮の～」という特定の地域における課題探求ではなく「日本の～」というテーマ設定になった。「日本のものづくり」「日本のメディア」「日本のゲーム・アニメーション」「日本の歴史・文化」「日本の行政」「日本の経済」「日本の宗教」「日本の商業」「日本の食文化」の9つのグループを設定し、学生の希望調査を行ってグループ分けをした。

9期は再び合宿地での課題探求になり、訪問先である千葉県金谷地区における6つのテーマ、「金谷の暮らし」「金谷の歴史」「金谷の芸術」「金谷の食文化」「金谷の文化」「金谷の交



GCA 東京 2017 冬 課題探求型現地研修発表会（於 千葉県一宮）

通」を設定，学生たちはグループによる調査を行った。

教員がテーマの枠組を設定してグループで調査を行うスタイルを確立させた効果としては、テーマの数が限定されているので教員の指導が行き届くこと，個人では決して選ばないような訪問先（過疎地における様々な機関，東京でいえば大田区産業振興協会，広沢電気工業株式会社，谷中銀座振興協会など）に行き，知らない業種の人に会い，インタビューをしたりする「新しい経験」ができること，チームで力を合わせて探求するので自分一人ではできないことができることであった。メンバーで手分けして資料を探し事前学習をする，インタビュー内容を皆で考える，インタビュー時には聞き役，記録役など役割分担ができるといった点は，グループ学習ならではの強みである。

良いことばかりではない。“しっかりした事前調査があってこそその現地研修だ”という理念で実施するには2-3週間の研修はいかにも短い。留学生の来日を待ってスタートするのは日程上どうしても間に合わないのである。訪問先もそれぞれアポイントメントをとっておく必要もある。そこで，日本側参加者を中心にメインの調査先を設定し，留学生にはその後で希望するグループを考えてもらってグループ分けをする形を取ったりもした。人数の関係で全員が第一希望に入れるとは限らず，さらに自由にテーマを決められた従来型とは違ってグループによる束縛があるので，本当にやりたいこととのミスマッチが見られる場合もあった。

そうしたデメリットに対するスタッフの対策であるが，事前研修に時間が足りない点については，LMSを用いて（学習院では長く manaba global を使用）来日前の研修生とも密に連絡を取り，研修生が置いてきぼりにされた感覚にならないように努力した。また，グループワークになると，個人個人が本当にやりたかったことができない場合もあるという問題については，課題探求型現地研修の意味を学生に正しく伝えるように努力を重ねた。すなわち，



探求力や調査力を高めることを目標としているのであれば、自分がかつともよく知っていること、やりたいことをテーマにしているよりも、むしろ「降って湧いたような難題」にこそ取り組むべきであり、それをどのように乗り越えるかに知力を尽くすことによって達成できるのではないかと考えたためである。さらに今後の社会変化を見据えると、ある課題が与えられた時に、多国籍チームでどう乗り越えるかを体験してみることに大きな意味があると考え、プログラムの募集時、開催時、修了時など事あるごとに説明し、意図が伝わるよう心がけた。

こうして「個人ではなくグループで」「好きなテーマではなく、教員が与えた枠組みで」というやり方は、7期から始まり、現在のGCA東京プログラムでもそのまま生かされている。

#### IV. 「GCA 東京学生部」の誕生

前述した通り、GCA東京に集う留学生は毎回40人から50人程度であったが、そこに加わる日本側参加者の人数は60名から100名であった。この人数全員が毎回の授業や研修に参加するわけではないが、この母集団に対してシフトの聞き取りを行い、「8月1日の2時間目と8月3日の1時間目に参加できます」といった返答をもとにして、一人一人のシフト調整を行うことは、なかなか手がかかる仕事であった。また、大交流会のマネジメントも、かつては中国や韓国へのGCAの派遣生が中心となって企画してくれていたが、「派遣は派遣」、「受け入れは受け入れ」と業務が縦割りになってきた経緯もあり、GCA東京の日本側参加者たちが中心となって企画をせざるを得なくなっていった。そうになると、自然と日本側参加者の中で、リピーターとして何度も参加していた学生の中からリーダー的な役割を担う学生が現れた。その中心的なメンバーが十数名集まり、2015年秋に「GCA東京学生部」というサークルが発足した。

「GCA東京学生部」は年間を通して、学生の立場からGCA東京の企画や運営の補助をすするためのサークルである。この学生部メンバーが、さらに「日本語授業班」、「課題探求型現地研修班」、「大交流会班」と3つの班に分かれて、それぞれ、教師が集めた日本側参加者の「参加希望時間」を受け取ってシフトを考えたり、前もって聴取しておいた留学生の「課題探求型現地研修のテーマ希望」を受け取って、そのテーマならどのような調査地が推奨できるか、どのような活動ができるのかを事前調査したり、大交流会の企画をしたり、といった役割を担った。それ以外にも、空港へのお迎え、オリンピックセンターでの宿泊のサポート、初登校日の大学までの引率、大学周辺や新宿駅をマスターするためのオリエンテーリング、



学生部メンバーによる説明会の様子

歓送別会の企画や、プログラム期間中のBBQ企画など、大活躍であった。4年生の中心メンバーが卒業する際には下の学年メンバーが部長や副部長を引き継ぎ、仕事を受け継いでいったため、教員や職員としては、毎回新しい応募者に対して同じ説明を繰り返す必要がなく、プログラム運営上、大きな助けとなっていた。

彼らの重要な任務の一つに、「日本側参加者の募集時に学習院生対象に行うプログラム説明会」があった。元々は教員が学生を集めてプログラムの内容などを伝えていたところ、せっかく学生部が存在しているのだからということで、彼らにプログラム内容や、その魅力、自分たちが参加して得たこと、プログラム期間中に自分たちが何をするのかなど、学生目線で語ってもらおうということになり、彼らに説明会を任せたと、非常にうまく機能していたように思えた。毎回、近くで観察していたのであるが、学生が「過去の参加者」という立場からプログラムの魅力を語る方が、参加希望者にアピールするようで、希望者の拡大や定着に大きな影響があったように思われる。

2015年に産声をあげた学生部は、その後も活動を続け、5年目となった2019年に大きな転換期を迎える。学習院大学国際センターで行われる、GCA東京以外の国際交流企画にも参画することになり、それに伴って名称を「国際交流企画部」に改めることとなった。

## V. 異分野の研究・教育者による協働プログラムの意義

### 1. GCA東京の担当教員とその専門

以上でGCA東京の設立経緯と、その後の発展について述べてきた。途中で課題探求型現地研修の形態が個人調査からグループワークへの変化したことも述べた。この節では、標題にもなっている「異文化の研究・教育者による協働プログラム」について説明する。

まず、筆者が担当した1期から9期までのプログラムの担当者とその学問分野を以下の表に示す。教授や准教授、PD共同研究員は学習院大学の所属である。日本語コーディネーターは有期で外部雇用するケースが多かったが、こちらは皆、日本語学か日本語教育学を専門とする教員であった。異分野の研究・教育者による協働が見られたのは課題探求型現地研修の担当においてであるので、そちらの担当者は専門を詳細に記している。

こうして振り返ると、1期から8期までは責任者が史学の専門家であったこともあり、史学系の研究者が担当することが多かった。しかし史学といっても、古代史から近代史、現代史もあり、社会運動に視点を当てた研究もあれば農村の発展についての研究、ジェンダーに関する研究もあり、実に様々である。研究分野が違えば自然と調査の方法も異なる。学生にどのように方法論を提示し、どのように指導するかも様々であった。スタッフとは毎回の会議でそれぞれの分野の知見を出し合って話し合いを進めるように心がけていた。

## 2. 異分野間の協働の意味

表3で示したように、筆者は学習院大学で勤務した5年間、歴史、経済、政治など様々な分野の専門家と協働して日本語教育プログラムにおけるプロジェクトワーク（課題探求型現地研修）を担当した。どのようなテーマが良いのか、そのテーマについて現地研修を行うのであれば、どのような場所に行き、どのような人物に会うべきか、方法論としてはどのような順序で学生に取り組みさせるべきかという全体的な構想から、スタッフ間で問題を共有し、話し合いながら進めてきた。その結果、異分野の研究・教育者が集まって作り上げたからこそ得られる教育上の効果を実感することもしばしばであった。

通常、言語教育の現場においては、コースの目標として「言語能力の習得」に焦点が当てられているため、他分野の研究・教育者がコースの実質的な担当者として教育に当たることはそれほど一般的でないと思われる。日本語教育で言えば、日本語教育学や日本語学及びその関連領域を専修した研究・教育者が教鞭を執るのが通常であり、それ以外の分野の専門家は、ゲストスピーカーとして招かれ、授業内講演を行ったり、インタビュープロジェクトなどのインタビューイとして協力したり、といった関わり方にとどまるケースが多い。

その一方で、最近の教育業界一般の傾向として、アクティブラーニングやタスク重視の活動が推奨されており、日本語教育においても実践的な言語能力を養う学習のあり方としてプロジェクトワークなどの活動を行うことが増えてきている。プロジェクトワークの内容は多岐にわたるが、しばしば目にする内容として、「日本」にまつわる様々なテーマ（日本文化、日本事情、日本の社会や芸術、宗教や自然など）について調べ学習をして発表する、といった調査成果発表型のワークなどがある。実際に身近な地域に出て行ってフィールドワーク的

表3 グローバル・キャンパス・アジア東京の担当者一覧

期	責任者 (学問分野)	課題探求型現地研修の担当者 (専門)	日本語教育 コーディネーター
1	村松弘一 学習院大学教授 (歴史学分野)	村松弘一教授 (中国古代史) 川上淳一准教授 (経済政策) 幸松英恵 PD 共同研究員 (日本語文法)	大江淳子 (外部雇用) ※学習院大学所属ではなくその時期のみ有期雇用
2	村松弘一 学習院大学教授	村松弘一教授 (中国古代史) 伊藤真実子准教授 (日本近代史) 幸松英恵 PD 共同研究員 (日本語文法) 許家晟 PD 共同研究員 (日本思想史)	大江淳子 (外部雇用)
3	村松弘一 学習院大学教授	村松弘一教授 (中国古代史) 幸松英恵 PD 共同研究員 (日本語文法) 許家晟 PD 共同研究員 (日本思想史) 進藤久乃 PD 共同研究員 (フランス文学)	大江淳子 (外部雇用)
4	村松弘一 学習院大学教授	村松弘一教授 (中国古代史) 幸松英恵 PD 共同研究員 (日本語文法) 許家晟 PD 共同研究員 (日本思想史)	大江淳子 (外部雇用)
5	村松弘一 学習院大学教授	村松弘一教授 (中国古代史) 幸松英恵 PD 共同研究員 (日本語文法)	村上佳恵 (外部雇用)
6	村松弘一 学習院大学教授	村松弘一教授 (中国古代史) 幸松英恵 PD 共同研究員 (日本語文法) 井上陸 PD 共同研究員 (比較政治, 福祉)	村上佳恵 PD 共同研究員
7	村松弘一 学習院大学教授	村松弘一教授 (中国古代史) 幸松英恵 PD 共同研究員 (日本語文法) 青木俊介 PD 共同研究員 (中国古代史) 五味知子 PD 共同研究員 (中国近世史, ジェンダー)	幸松英恵 PD 共同研究員
8	村松弘一 学習院大学教授	村松弘一教授 (中国古代史) 幸松英恵 PD 共同研究員 (日本語学) 青木俊介 PD 共同研究員 (中国古代史) 河野正 PD 共同研究員 (中国現代史) 金耿昊 PD 共同研究員 (日本現代史)	幸松英恵 PD 共同研究員
9	小林立明 学習院大学准教授 (経済学分野)	幸松英恵 PD 共同研究員 (日本語学) 青木俊介 PD 共同研究員 (中国古代史) 河野正 PD 共同研究員 (中国現代史) 金耿昊 PD 共同研究員 (日本現代史) 渡辺陽子 RA (日本語教育学)	幸松英恵 PD 共同研究員

な調査をする，というのも一般的だろう。

その際に，プロジェクトをコーディネートし，ファシリテートするのは日本語教師になる。プロジェクトワークの内容が教師の専門性と合致したものであれば別であるが（例えば，言語学を専門とする日本語教師がテーマとして「若者のスピーチスタイル調査」を選び，指導する等），多くの場合は専門外のことを扱うことになる。大学レベルの教育において，異分





PD 共同研究員（史学分野）からの指導を受ける学生

野の教育・研究者がそのテーマについて指導をするということは普遍的な現象ではないだろう。その際には「言語能力の向上」に重点を置いたテーマ学習であることを謳いつつ、「課題探究力や調査力の向上」も狙うという二兎を追うスタイルになるのが大部分ではないかと思われる。その「言語能力の向上」と「課題探究力や調査能力の向上」の比重は、プロジェクトワークが可能になる中級から超級にかけて、おそらく反比例して行くのではないかと想像される。つまり言語の運用レベルが上がるにつれて、言語能力そのものを超えて、課題探究力や調査能力の向上に比重を置くプログラムになっていく。そのとき、テーマそのものに日本語教師がどこまで肉薄し、どこまで指導できるのかということにジレンマを感じることもあるかもしれない。

学生の立場からも、ある程度時間をかけて授業内活動として取り組んでいるプロジェクトのテーマであれば、正しい方法論で学びたいと考えるだろう。特に上級や超級の学生にとっては「目標言語」をツールとして「専門性」そのものを深める素地はあり、場合によっては当該分野の大学院生の方が、語学教師以上にテーマについて詳しい場合もあり得る。

筆者の専門はフィールドワーク調査を伴う分野ではなく、社会科学分野における調査手法に関しては未知の領域であった。上表のような様々な研究・教育者とミーティングを重ね、時にはぶつかり合いながらも、課題探求型現地研修を指導してこられたのは、自分自身のキャリアにとって大きなプラスとなっている。本務校における現地調査の指導時に、この時の経験が活かしているのではないかと思うことがしばしばである。

反対に、日本語教育に関わったことがない担当者にとっては「日本語教育」の専門家と共に仕事をする中で、日本語教育の専門家が、日本語学習者に対してどのように接し、どのような点に注意を払っているのかを間近で見ることとなった。その結果、「異文化コミュニケーション」という要素を加味しての調査指導をする体験を得たそうである。今後、人口減

少による大学入学者の減少分を留学生で埋めようとする傾向が加速することを思えば、学部や学科の指導学生における留学生の占める割合が増えていく可能性が高い。その際に、若いPD共同研究員だった時代に日本語教師と共に日本語学習者の指導に当たった経験は、それぞれの研究者の留学生教育への理解に大きな影響を持つのではないかと思われる。

## おわりに

---

GCA 東京が対象としてきた日本語中上級以上の学生になると、将来的に長期留学を計画していたり、日本での就職を希望していたりと、日本社会での生活者になる意思を持つ日本語学習者が多い。そのような学生にとっては、言語能力もさることながら、日本人との共学・協働の経験値をあげることは重要なことである。彼らが学ぶ本国の教育機関や日本の予備教育機関では言語能力を高めることに注力しなければならず、共に学び、プロジェクトを行える日本人を確保することもそれほど簡単ではないと思われる。

同時に、日本国内企業のグローバル化が進み、多国籍チームでの協働が進むことが予想される中、日本の大学で学ぶ日本人学生にとっても、外国人学生との協働の場を経験することは、今後ますます重要になると思われる。

そのような背景において、GCA 東京の、日本語を「コミュニケーションのツール」として使用し、日本語母語話者とも協働して課題探求型現地研修をするというプロジェクトワーク型のプログラムは、一定の効果を持っていたと言えるだろう。その際に、日本の歴史、日本の伝統文化、日本の社会経済など、広く日本の事象に関する現地研修の指導を、日本語教育学や日本語学を専門とする教員のみで行うのは難しい場合もあり得る。GCA 東京は設立の経緯から、やや特異な組織で留学生教育を担当してきたのであるが、結果としては幅広く深い学びを提供することが可能になっていたのは事実である。

10期以降、さらにGCA 東京は発展をつづけたのであるが、その詳細については、本研究年報の原・青木（2021）を参照されたい。

（ゆきまつ はなえ 東京外国語大学講師）